

坂井北部丘陵地での若狭牛放牧

耕作放棄地の活用や獣害対策の一手段として、全国各地で和牛（黒毛和種雌牛）の放牧が広がっています。

福井県でも、嶺南地域を中心に若狭牛の放牧が行われています。今回は、坂井北部丘陵地の遊休農地で、クズ・セイタカアワダチソウなどが優占する野草地に、2年間にわたり若狭牛を放牧し放牧可能日数、受胎状況などを調査しました。

この野草地の放牧可能日数は、輪換放牧（20a×2区）した場合は、連続放牧（40a）に比べ、1年目で27日多い74日、2年目で5日多い47日となりました。また、輪換放牧（5ヶ月間）における1頭当たりの必要面積は、1年目が41a、2年目が64aと試算されました（表1）。

また、放牧2年目の草量不足の対処するために初年の秋に、牧草種子を播種しました。40aの野草地にイタリアンライグラスを用いペレット

播種と耕起播種の2通りの方法で比較したところ、牧養力（牛1頭を1日放牧できる日数を1CD）は、それぞれ415CD/ha、455D/haとなり野草地（2年目）の235CD/haの約2倍も長く放牧できるようになりました（表2）。

繁殖牛の受胎の遅れは農家にとって大きな経済的損失になります。放牧は、運動不足や日光浴不足を解消し、ビタミンなどの栄養素を摂取させる等、飼養管理の改善につながるため、受胎促進の有効な対策として期待できます。

今回の試験でも、2年間での供試牛8頭中6頭が長期不受胎牛でしたが、7頭まで受胎させることができました。

繁殖農家にとって放牧は、飼料費の節減・管理の省力化・飼養規模の拡大などのメリットがあるととともに、遊休農地を無駄なく利用できることで、双方に有益な方法と言えます。

（畜試 資源活用研究G 村田文彦）



写真1 放牧風景（庇蔭樹）

表1 放牧日数から換算した牧養力、必要面積

	輪換放牧(20a×2区)		連続放牧(40a)		
	H18	H19	H18	H19	
放牧 日数 (日)	1巡目	17	28	17	36
	2巡目	34	14	28	2
	3巡目	23	5	13	4
	合計	74	47	58	42
牧養力 (CD/ha)	370	235	290	210	
5月間放牧に必要面積(a/頭)	41	64	52	72	
生草収量(kg/a)	242	154	190	137	

表2 ペレットまたは耕起播種区の放牧日数、牧養力

	ペレット播種区(40a)		耕起播種区(40a)	
	放牧日数(日)	1巡目	9	63
	2巡目	49	13	
	3巡目	17	11	
	4巡目	8	4	
	合計	83	91	
牧養力(CD/ha)		415	455	
5月間放牧に必要な面積(a/頭)		36	33	



写真2 簡易集合柵での人工授精